

## 2026\_0405「春のオーロラ」日々の理科 4256号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

月の北の空に現れるオーロラは、冬の深い闇の中で見るそれとは少し趣が異なります。空のどこかに春の気配が混じり、緑のカーテンの上に、やわらかな紫色がほのかににじみます。この夜、ひととき印象的だったのは、孤立して立ち上がる針状のオーロラレイでした。細く鋭い光の柱が月の光に重なり、まるで夜空に一本の指標が立てられたかのように、オーロラ全体の構造を際立たせています。

足元には、まだ完全には解けきらない雪と、氷に覆われた湖が広がっています。冬の名残をとどめた静かな大地と、その上にゆらめく春の光。季節がゆっくりと交代していく、その境界に立っていることを実感させられます。北緯67度のこの地では、オーロラシーズンは4月中旬頃まで続きますが、夜の時間は日ごとに短くなり、観測の機会も次第に限られていきます。

この神秘的な光景が見られるのも、あとわずか2~3週間。やがて白夜が訪れ、空は夜の深さを失います。だからこそ、この一瞬一瞬の光が、ひととき貴重に感じられるのです。

